六条公民館新聞

令和６年
5月10日(金)

発行所：六条公民館
電　話：0776-41-1001
発　行：不定期
適時無料配付

昔ながらの田植えを体験

泥まみれで汗した経験から学ぶこと

児童たちに農業に親しみをもってもらおうと、六条公民館が田植えを体験する「六条っこ田」を２日遅れで行いました。

耕され代掻を終え水が張られた田が、青い空を一面に映しだしたキャンパスとなり、児童を迎えました。

六条公民館では地域の農業を学ぶ「食育」の一環として、児童たちが米作りを体験する「六条っこ田田植え」事業を以前から行っています。

「米」という字を分解すると八十八になることから、「お米作りには88の手間がかかる」と言われていることや、苗になるまでには地域の農家の方が大切に育てていたのだということを学んだ上で、苗は２～３本に分けて、根っこの近くを持つことや、植える時には、指の第２関節より少し先まで土に入るように植えることなどの説明を受けた後、田植えに臨みました。

まずは、公民館前で昔の田植えの苦労について担当者から説明を聞き、今回も昔ながらの手植えに挑戦。

六角組みの木枠を転がして植えることや、苗の持ち方、足の入れ方など・・・、

大人の方から少しずつ苗を渡され、根がくっついている苗を２～３本に分ける時には、恐る恐るの児童たちでしたが、土の部分を丸く整え、「なんか、かわいいかも！」と眺めていました。

田植えのために、ずぼずぼと田んぼに入ると、前の子の足跡にはまって「先生！ぬけなーい！」という声が聞こえたり、「ぐにゃってする気持ち悪い！」という声もやはり聞こえてきたり・・・。ですが、大切な苗をしっかりと持って田んぼの中を、膝下まで泥につかりながら、稲の苗を25㎝間隔の木枠跡に次々に植えていきました。

一言で「植える」といっても、水の張ってある田んぼに上手に植えるのはなかなか難しく、植える位置の印があってもうまくその位置に植えられなかったり、しっかりと植えられなかった苗が流れていってしまったり・・・児童にとっての作業はとても大変でした。

「農家の人は、大変だね。」と、作業中、児童たちがつぶやいていました。

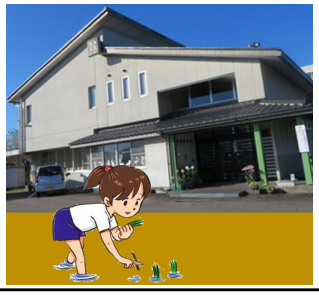
児童たちは作業を通して、しっかりと学んでほしいと公民館長は語ります。

児童たちは泥だらけになりながらも、１時間ほどかけて、公民館横の田んぼに苗を植えていました。

参加した児童は、「田植えの途中で尻もちをつきそうになりました。収穫したお米を食べるのが楽しみです」と話していました。

植えられた苗は、９月下旬に収穫される予定で、10月の収穫祭で食べるということです。

公民館では田植え体験を実施し、普段の生活ではなかなかできない経験をさせてみて、好奇心をくすぐろうとする狙いもあり、自然に触れ合うことが減ってきている児童たちにとって、田植え体験は好奇心の刺激以外にもさまざまな「学び」をもたらせてくれます。



今回の田植えは、食べ物を大切にする心や作り手へ感謝する「食育」だけでなく、地理や流通について学ぶ「社会」の学習へもつながるなど、児童の主体的・創造的・協同的な心が育む一助になればと公民館長は続けました。

児童達は、学校の行き帰りの通学路で、自分達で植えた稲の成長を見守りながら、色々な景色に出会い、心に織り込んでいくことと思います。